

玉川上水ミニ観察会観察日記

2018年7月1日

7月の観察会で注目したものは「エゴノネコアシ」という虫こぶ。エゴノキで越冬したエゴノネコアシアブラムシの受精卵が孵化し、枝の新芽を食べると新芽が刺激され、変形して虫こぶになるそうです。それが猫の足に見えることから命名されたようですが、私には小さなバナナに見えました。

不思議なことに、そのアブラムシは春の間はメスが単独で生殖します（胎生単為生殖）。夏になると羽が生えた虫が生まれてイネ科のアシボソに移動し、ここでもメス単独での生殖をくりかえします。秋にはまた羽がある虫が生まれてエゴノキに舞い戻り、今度は雄と雌が生まれ、受精して卵で越冬し、春に孵化するというサイクルです。長い生命史において、食べ食べられるものがお互いに影響しあいながら、ユニークな関係を作って進化してきたのだと思いました。（リ）



コナラの芽生え

「玉川上水保全署名」活動

7/29 (日)、8/19 (日)、9/2 (日)

9/23 (日)、10/7 (日)

午前10時～東鷹の橋周辺

(小平中央公園南西入口) 雨天中止

ミニ観察会

7/29 (日)、9/2 (日)、10/7 (日)

午前10時半東鷹の橋集合。

約1時間玉川上水の植物や昆虫を観察します。参加費無料、

申込不要。小雨決行。

案内：宮元伸也さん



発行日：2018年7月22日

題字：石渡希和子

発行人：みどりのつながり市民会議 <https://midoritsunagari.wordpress.com/>

問合せ先：電話 042-341-3991 メール midoritsunagari@gmail.com

用水の歴史と地層をたどる

ほっこぬきさんぽ

報告：用水路の水を止めないよう求める会

6月16日（土）、玉川上水駅から新堀用水のほっこぬき（胎内堀）坑口まで歩く「ほっこぬきさんぽ」を開催しました（講師：矢崎功さん 玉川上水再々発見の会）。集合場所の玉川上水駅は国分寺崖線の北端にあたります。東へ坂を登り、一番高い標高約100mの地点を超えると地形が変わり、関東ローム層が更に厚くなるそうです。玉川上水は三鷹付近まで武蔵野段丘の尾根の上を通るとのこと。ふだん意識しない地層のお話で景色が変わって見えました。

小平監視所では、柵外から見学したり、貴重な資料の写真を見せていただいたり、周辺の多様なマンホールを見たり、水にまつわるお話を次から次に聞くことができました。

新堀用水の上流部約900mは、地上から複数のたて穴を掘り、その間を横に掘ってつなげる「ほっこぬき」でつくられています。玉川

上水に並行して地下を流れる新堀用水のたて穴は、小川橋上流にかつて51ヶ所ありましたが、今は4ヶ所が残るのみ。柵に囲まれた穴から水の流れる音が聞こえるところもあります。

ほっこぬきの坑口では、2日前にホタルを見たという報告がありました。約150年間維持されてきた素掘りの坑口は、今年度の新堀用水（胎内堀）保全工事によって15m埋め立てられて暗渠になり、下流に新しい坑口がつけられる計画になっています。

矢崎さんから、「5年前の上水公園南側での亀裂事故のため、小川橋より下流の新堀用水は約半年間水が止まったが、今も生態系はダメージを受けている」「市内用水路の喉元のところでここ約40年来、長期間水が止まったことはない。環境はそう簡単に元に戻らない」とお話を聞き、用水路の水を維持してほしいと強く感じました。（用）



シンポジウム 「玉川上水と生物多様性」 報告

主催：小金井玉川上水の自然を守る会

今年4月22日、小金井市内で開催された上記シンポジウムは、満場で人が溢れ、活気に満ちていました。講師は、小泉武栄氏（東京学芸大学名誉教授）、新里達也氏（㈱環境指標生物代表）、坂田昌子氏（国連生物多様性の10年市民ネットワーク代表）の3名で、それぞれの視点から生物多様性の大切さについて話されました。

小泉氏は、特に小平地域は玉川上水と新堀用水が並行して流れているため気温が低く、本来は冷涼な山の植物であるクマシデやムラサキシキブ、タマアジサイ、ホウチャクソウ、ヤマユリなどや、絶滅に瀕しているゼフィルス類（樹上性シジミチョウ類）など、多様な生物が見られることを指摘し、玉川上水を分断する道路計画は地下にすべき、と話しました。

新里氏は、明治神宮の林に残された武蔵野本来の生物多様性の話から始め、山と都心をつなげる緑の回廊としての玉川上水の大切さを説きました。そして、環境や生物多様性の重要性を理解するには、10年20年の目先ではなく、100年先を考える想像力が必要と指摘しました。

最後に話した坂田氏は、琵琶湖では魚が大きく減少しており、取り返しがつかなくなるところまで来つつあるとした上で、種が生き延びるには遺伝子の多様性が大切であり、珍しいものだけを守ろうとしても駄目で、関係性を丸ごと守っていく必要があること、それには地域住民の力が重要であることを力説しました。あらゆる生き物は同じように見えても一つ一つ違う遺伝子を持っていて、一つ一つが大切だという坂田氏のお話は、目からウロコが落ちる思いがしました。（水口）